

ネクスト ソサエティに向けたキックオフ

六甲山に公共下水道を

— 提言 —

平成15年2月

社団法人 神戸経済同友会

序

多くの期待を持った21世紀が早や3年目を迎えました。1990年代からの失われた10年が、さらに年月を重ね、20世紀のパラダイムから、21世紀のパラダイムへの転換ができずに、国が、地域が、企業が、多くの人々が中々未来を見出せずにいます。

兵庫・神戸経済も依然として厳しい経済環境にあります。しかし、震災以降、暗い長いトンネルの中と思われていた神戸では、医療産業都市構想が着々と進展しつつあり、NIROなどによる新産業創造の地道な取り組みも進められ、ようやくツキが、幸運の芽が見え始めました。

更に、これらの地域の経済を活性化させるためには、過去の成功体験にとらわれず、工業社会、大量生産の呪縛を取り払い、21世紀の新しい価値観に則った知識、知価社会へのシフトが、各々の企業、産業、そしてあらゆる部門に對して求められています。

このような問題意識の下、神戸経済同友会は本年度の提言担当委員会である地域開発委員会において、海と山に囲まれ、優れた都市景観を誇る「神戸」の枕詞として、当たり前のように引用される六甲山に焦点を当て、当たり前のように存在する六甲山が抱える課題について、議論を重ねました。

そして、従来、経済構造が変わるから、社会構造も変わると思われていましたが、実は、人々のライフスタイルや社会の変化が経済構造の変化を促すという観点に立ち、六甲山の未来を考える中に、そうした21世紀の新しい価値観に則った課題解決の芽が内包されているととらえ、六甲山に関わる諸問題を取り上げ、今日的な六甲山の活性化策が、ひいては地域の魅力、経済活性化への大きな指針を示せるとの思いから、この度、その議論の成果を提言として取り纏め、「六甲山に公共下水道を～ネクスト ソサエティに向けたキックオフ～」を提言します。

この提言を契機に、私たちの大切な資源である六甲山をケーススタディとして、兵庫・神戸が全国に先駆け、20世紀の呪縛を取り払い、新しい21世紀のライフスタイルをリードする地域、人間らしい感性あふれる地域として羽ばたく一助になれば幸いと考えます。

この提言を取り纏めるにあたり、長期にわたり熱心に討議に参加された井堂委員長をはじめ、副委員長、委員各位、並びにワーキンググループのご協力とご努力にあらためて感謝と敬意を表する次第です。

平成15年2月

社団法人 神戸経済同友会
代表幹事 岩田 弘三
代表幹事 池田 志朗

目次

I.はじめに	1
II.今なぜ六甲山なのか	3
III.課題を抱える六甲山の現状	4
IV.提言にあたっての基本的な考え方	6
V.提言 「未来からの警鐘に応え、六甲山に公共下水道を整備すべき」 ～ ネクスト ソサエティに向けたキックオフ～	7
1.六甲山の現状	7
2.公共下水道整備の必要性	7
3.公共下水道整備にあたって	8
VI.おわりに	10
<資料編>	12
<地域開発委員会における研究活動及び討議経過>	29
<提言作成に際し、ヒヤリング・資料提供にご協力いただいた方々>	31
<平成 14 年度 地域開発委員会名簿>	32

I.はじめに

P.F.ドラッカーは最新刊『ネクスト・ソサエティ』の巻頭言において、「日本では誰もが経済の話をする。だが、日本にとっての最大の問題は社会の方である。イノベーションという言葉は殆どの人にとって技術的な革新を意味してきたが、今日もっとも求められているのは社会的な革新なのである。ニューエコノミーが論じられ始めた90年代の半ば、私は、急激に変化しつつあるのは経済ではなく社会の方であることに気づいた」と述べ、「変化をもたらすのは経済ではなく社会そのものなのだ」と指摘している。

戦後嘗々と続いてきたわが国の経済主導主義は、ここにきて社会構造の急激な変化に追いついていけず、大きな矛盾を露呈している。また、戦後一貫して経済界のオピニオンリーダーとして主導的な役割を果たしてきた経済同友会をはじめ、各種経済団体や多くの企業は、社会構造や価値観の大変動を目の当たりにして、立ち竦んだまま新しい方向を見出せずにいる。

神戸に目を転じてみると、震災復興はいまだ道半ばながらウォーターフロントでは再開発・整備が着実に進みつつあるのとは対照的に、六甲山はこれまで忘れ去られていた感もあるが、社会構造の大きな変わり目の中で「一周遅れのトップランナー」となる可能性も秘めている。

神戸経済同友会地域開発委員会では、こうした状況変化も踏まえ、地域社会に対し責任を負う企業市民の一員として、当地域活性化の諸方策について数年来議論を重ねた結果、市民にとってマザーマウンテンといえる「六甲山」の再生をテーマにとり上げることとし、六甲山の環境を守りながら賑わいを取り戻すことを目指して、市民や企業、行政から意見を聞きつつ、さまざまな角度から調査・検討を行ってきた。

六甲山はいま、良くも悪くも変わりつつある。明治中頃まで六甲山は荒廃した禿山であったが、その後植林事業が開始され、昨年、緑化100周年を迎えた。現在、国や兵庫県、神戸市を中心に「六甲山系グリーンベルト整備事業」をはじめ各種の取り組みが進められている。その甲斐あって六甲山に緑豊かな植生が再生されたことは過日の『六甲山系でハヤブサ繁殖』の新聞記事でも証明されている。食物連鎖の頂点に立つ猛禽類の棲息はそれ自体豊かな自然の証である。

昨今、日本の原風景である里山を大切にしようという運動が各地で盛んになっているが、あらためて見てみると、全国の県庁所在地のうち国立公園を抱えている都市は12しかなく、しかも市街地から僅か1km余りで国立公園に到達するという例は神戸市において他にはない。まさに六甲山系は大都市が抱える「希少な里山」といって過言でない。

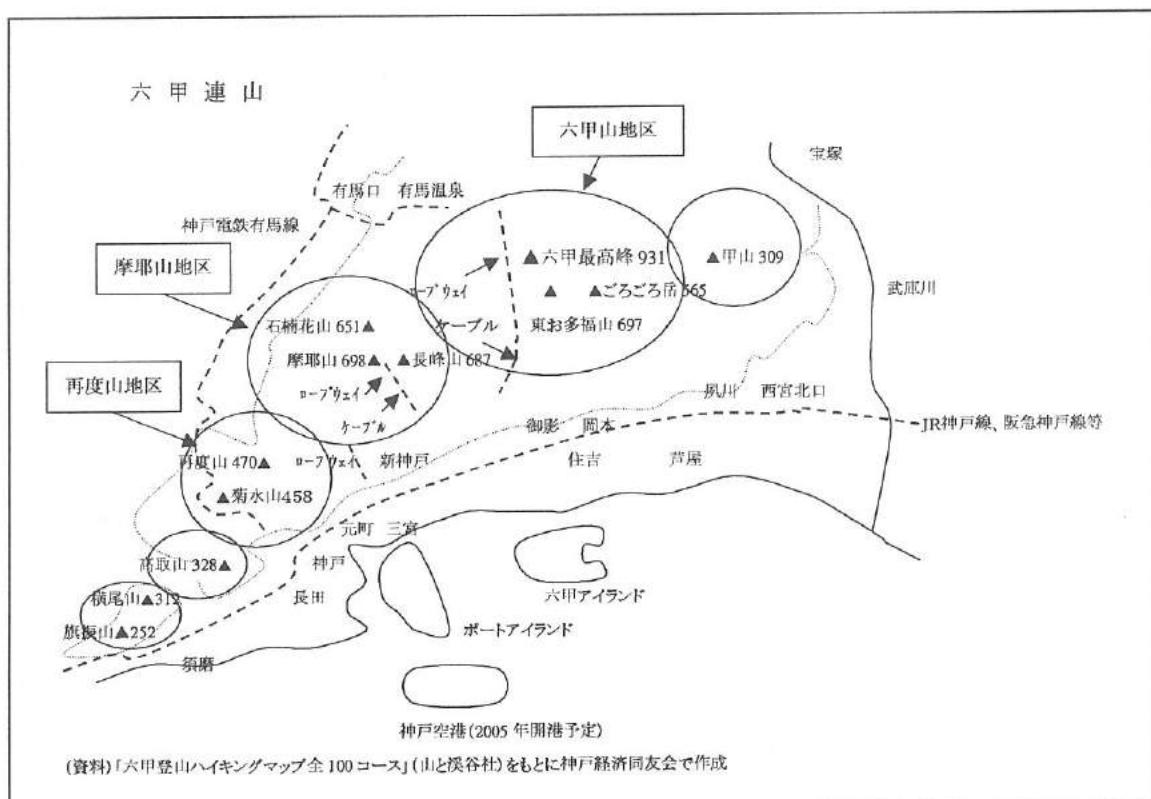
しかしながら、往時年間800万人を超える観光客で賑わい、「百万ドルの夜景」を売り物にした六甲山も今では500万人を下回り、また当時競うように建てられた企業や個人の保養所、山荘もその多くが時代的な目的、役割を終え、急速に荒廃の道を辿ろうとしている。

ている。

六甲山の100年の歴史はそれぞれの時代の「光と陰」を宿しており、ある意味で矛盾を孕んだ、まさに日本社会の縮図といえる。その意味で、あらためて森林の再生、開発と保全、自然と人間の共生といった今日的課題を六甲山というフィルターを通して考えてみることは意義深い。

人の手が加わって以来100年にわたって六甲山は眼下の神戸の街を見守ってきたが、近年の山上諸施設の荒廃や観光客の半減といった諸現象は、物言わぬ山がわれわれに対して警鐘を鳴らしているように思えてならない。六甲山が抱える今日的課題を通して神戸さらには日本の「ネクスト ソサエティ(次なる社会)」を模索していくことは意義があり、この提言がその一助となれば幸いである。

六甲連山は、東は武庫川から西は神戸市須磨区まで東西30km、南北8kmにわたって横たわる六甲山、摩耶山、再度山、菊水山、高取山、横尾山など15余の山々をいうが、本提言ではこのうちの六甲山のみを検討対象とした。



II. 今なぜ六甲山なのか

(1) 六甲山の魅力

六甲山は瀬戸内海国立公園内に位置し、風光明媚で、市街地からのアクセスも便利であり、関西の奥座敷有馬温泉にも近く、神戸市内や京阪神一円を中心に多くの人々で賑わった。今もハイカーには根強い人気があり、かつての百万ドル、1千万ドルの夜景を含め、六甲山の知名度は依然として日本全国でも高い。

司馬遼太郎の著書『街道を行く』に「水は、生で飲むのも、酒(西宮の宮水)にして飲むのも、六甲山系から湧き出る水がいい」、「神戸に寄航する外国船のよろこびは、水槽の水を空にして神戸の水をあふれるほど積むことだそうだ。船乗りたちは、コウベ・ウォーターは世界一だというが、おそらく本当だろう」とあるように、昔からその湧き水は名声が高かった。神戸市灘区から西宮市にかけて拡がる灘五郷で作り出される清酒も六甲山からの湧き水である宮水はじめ自然の持つ豊かさの賜物といえる。

(2) 課題を抱える六甲山

こうしたかけがえのない素晴らしい景観を有しているにもかかわらず、残念ながら六甲山は現在様々な課題を抱えている。とりわけ、被災地域やポートアイランド、六甲アイランドなどのウォーターフロントを中心に復興・再開発が着実に進みつつある一方、六甲山は観光客数の大幅減少、企業や個人が所有する保養所・山荘の相次ぐ閉鎖などその荒廃ぶりが目立つようになってきた。

ここで六甲山を見詰め直し、その将来を見据えて諸課題解決のための根本的な方策を考え、着実に実行に移していくかなければならない。もしも自然との共生を怠り現状のまま放置すれば、やがては自然からのしっぺ返しを食らうことになろう。

(3) 目指すべき方向

六甲山は今、全山緑に覆われているが、かつては禿山であった。こうした景観を憂えてわれわれの先達が100年前から植林事業を開始するとともに、わが国初のゴルフ場を開設し別荘を設けるなど、市民の手で育んできた、いわば盆栽にも似た山である。今後も、開発・利用と自然保護のいわばトレードオフのバランスをうまく保ちながら、新たな魅力ある資源としてプラスシュアップし、孫・子の代まで末永く受け継いでいかねばならない。

「六甲山の賑わいが薄れた」といわれて久しいが、われわれがこれから目指そうとしているのは、かつてのような多くの人でごった返す「量的な賑わい」ではなく、一人ひとりの価値観やライフスタイルを重視した満足度の高い「質的な賑わい」を創造することである。言い換えると、経済至上主義から脱却し、身近にある「都市公園・六甲山」とも呼べる他大都市にない貴重な自然環境を活かし、潤いや癒し、健康といった多様なニーズを充たす場にしていくことであり、それが神戸の新たな魅力、ブランドともなる。

III.課題を抱える六甲山の現状

上記視点に立ち、六甲山が現在抱える諸課題とその要因を整理してみる。

(1)観光地としての魅力の低下

海や市街地に近く、全国を見渡しても希有な環境にある六甲山に期待していざ登つてはみたものの、「伊豆、箱根などに比べ、魅力的な観光施設が殆どない」といった他地域からの観光客の声を耳にすることがあるが、入込観光客数の減少は観光地としての魅力が他地域と比べて相対的に薄れたことが主因であることは容易に想像がつく。

その背景には、多様化する利用者ニーズに対応して新たな観光資源を開発しようとしても、国立公園内にあるため国立公園に関わる諸規制に妨げられ、効果的な対応策を思うように講じられないといった事情がある。平成13年に市街化調整区域における土地利用規制が一部緩和されたものの、都市計画法や自然公園法などの法令、条例によって依然、大幅な制限が加えられているのが現状である。

(2)塩漬け状態の閉鎖保養所・山荘

バブル崩壊以降、各企業は大幅なリストラを迫られ、大半の企業保養所の運営母体である健康保険組合も財政難に陥っている。これに、ライフスタイルや価値観の急激な変化に伴い保養所・山荘に対する利用者のニーズが低下したことも加わり、その閉鎖が相次いでいる。

閉鎖したまま売却、用途転用ができず塩漬け状態にあるものが目立つが、その要因としては、物件の買い手が少ないとのことのほか、国立公園内における増改築・用途転用などを厳しく制限する規制の存在も大きい。これに加え、保養所等を閉鎖し土地を地権者(財産区など)に返却するには建物を取り壊して原状に戻さねばならないことや、土地を返却された地権者側にとっても固定資産税負担が重いことが挙げられる。

(3)山上の公衆トイレ不足

六甲山上では多数の観光客やハイカーが往来するにもかかわらず下水道が未整備である。

各集客施設等は自前で合併浄化槽等を設置し下水処理を行っているが、自助努力に委ねたままでは適切に維持・管理される保証はなく、汚水垂れ流しや異臭などの環境問題の発生も懸念される。

また、公衆トイレが神戸市、兵庫県の手でごく一部に設置されているが、観光客やハイカーなどの数と比較すれば圧倒的に不足しており、しかも汲み取り式が半数を占めるなど、利用者にとって到底満足できる状況にはない。山上とはいえ、市街地の公園と同様、多数の市民や観光客が訪れるいわば都市公園でもあり、そこに水洗式公衆トイレを設置することは当然必要である。

(4) その他の課題

以上のほかにも、山上の休日等における交通渋滞や、ごみの不法投棄といった解決すべき課題はある。その中でも現実問題としては、裏六甲周辺の道路でタイムを競いながら騒音をたて危険走行するローリング族問題が大きい。山上の静かな環境を損ない、観光客や地域住民の安全や安心を脅かしているため、関係各団体がローリング族対策委員会を設置し(平成 11 年 11 月)、バイープラインや減速マーク、駐車場夜間閉鎖などの対策を講じているが、山上の自然環境を守り、魅力を向上させるためには、引き続き地域全体が連携して取り組んでいく必要がある。

(注)バイープライン:豪雨でも見やすく、リズミカルな喚起音と振動を発生させる道路上のラインのこと

IV. 提言にあたっての基本的な考え方

(1) 共通認識の醸成

六甲山の再生、活性化を考える際に重要なことは、市民、経済界、行政を挙げて、「六甲山は海とともに神戸にとって最も貴重な財産の一つであり、その財産を守るとともに、一層その価値を高めていく必要がある」との共通認識を持つことである。

(2) 市民、企業、行政が取り組むべきこと

次にこの認識に立って行うべきことは、まず地元市民が六甲山への関心や意識(親山性、愛山心)を取り戻すことである。そのためには、例えば小中学生・社会人などを対象に、ボランティアによる六甲山の自然、歴史等の学習、ハイキングなど、野外活動の場として大いに活用することも有意義である。

また、民間主体による新たな投資を呼び込むことも重要である。遊休保養所等の所有者に対して有効活用を促すことも必要であるが、それよりもむしろ多様な利用者ニーズを踏まえて豊富なノウハウを持つ新たな経営主体に任せるべきである。

ただ、市民や企業など民間だけでできることには限界があるため、兵庫県や神戸市など関係自治体も含めたあらゆる関係者が六甲山の抱えている諸課題解決に向か、協働して取り組んでいく必要がある。

(3) 公共下水道整備が最優先課題

六甲山の再生、活性化に向けて各層が取り組みを進める上で大きなネックとなり、最優先で解決すべきはインフラの整備である。インフラにはアクセス(道路、バス、ケーブルカー、ロープウェイなど)、電気・ガス・上下水道、ゴミ処理などがあるが、このうち公共下水道は、六甲山の自然を守り、山上で人々が安全・安心・快適に時を過ごし、あるいは生活していく上で欠かせないにもかかわらず整備が遅れているため、六甲山の将来を考えれば早期に着手すべきである。

もしも公共下水道を整備しないまま、訪れる市民、観光客等が大幅に増加した場合、単にトイレ利用者が不愉快な思いをするだけでなく、各施設が合併浄化槽等により個別で行う汚水処理の能力もやがて限界に達し、汚水が垂れ流され、今すぐではないにしても百年単位でみれば美しい山も汚染が進み、山から湧き出る水にも悪影響が及んでいき、それは神戸のブランドイメージをも損ないかねない。下水処理問題を単なる「トイレ問題」としてではなく、六甲山が抱える諸問題の象徴と捉え、最優先課題として取り組む必要がある。

下水道整備には長い工期と多額の資金が必要で、厳しい地方財政の現状や企業負担といった問題もあるが、環境保全という長期的視点に立ち、これを「百年の大計」として、将来世代からも高く評価される事業として、市民の理解と協力を得つつ、今こそ着手すべきである。

V. 提言

未来からの警鐘に応え、六甲山に公共下水道を整備すべき ～ ネクスト ソサエティに向けたキックオフ ～

1. 六甲山の現状

かつては禿山と化していた六甲山の植林事業が開始されてから昨年で 100 年の節目を迎え、先人の労苦が実を結んで緑が蘇っている。しかし一方では、観光客がピーク比ほぼ半減し、企業保養所等諸施設も閉鎖に伴い荒廃ぶりが目立つといった六甲山の現状を見るにつけ、これは我々に対する未来からの警鐘と考えるべきである。とりわけ自然環境と人との共生については、個別具体的な取組拡充に向けてのカウントダウンが始まっている状況である。

六甲山は久しく神戸市内外の人々に親しまれてきた。全国の県庁所在地のうち市域に国立公園を擁している市は 12 あるが、この中でも中心街から僅か 1km 余という立地は稀有であり、まさに「都会にある国立公園」といえる。建物、乗り物の窓や街路等、数限りない場所からいつも見ることができる六甲山の緑影一つを探っても、恰も「空気のような」存在と言えるほど我々神戸市民にとって親しい。当委員会メンバーがこれまでの 4 年にわたる検討を通じて改めて痛感したのは、省みれば限りない六甲山の魅力や、恩恵の深さ、多様さである。



(資料)「武庫川から見た六甲山」(<http://www.page.sannet.ne.jp/kmura/rokko.jpg>)

2. 公共下水道整備の必要性

そこで、神戸経済同友会は、六甲山での公共下水道整備を提言する。これは、我々市民が暮らしの様々なベースを付託する神戸市に対する提言であると共に、神戸経済同友会会員やその所属企業を含め、市民各位並びに市内各事業体に向けた呼びかけである。

(1) ネクスト ソサエティに向けたキックオフ

公共下水道というインフラ整備プロジェクトを我々が提言する趣旨は、21世紀における新たな社会「ネクスト ソサエティ」に向けたキックオフにある。

そのポイントは大括りに二つある。一つは、自然という我々の「預かりもの」を、遠い将来世代に確かに伝え残していくという「数百年の大計」である。また、今一つは、「市民

の里山」「都市公園」ともいえる六甲山と我々との共生の在りかたを再構築することである。

山系に発する支流が河川の本流となり海に注ぐように、行政や市民の諸取り組みを大きなムーブメントに変えていく契機が必要であり、また、神戸という「都市ブランド」の魅力を高める極めて「今日的な課題」にも繋がるものと確信する。

(2) 現状の下水処理方式の問題点

六甲山上の下水処理は現在、大半が合併浄化槽などによる個別処理で行われているが、初期投資額が割安な反面、定期的にメンテナンスが行われなければ正常に機能せず、処理不十分な汚水の垂れ流しによる環境汚染に繋がるリスクを内包している。また、浄化槽設備自体、メンテナンスを続けてなお恒久的に使用可能ではなく、一定年数経過すれば更新が必要となるなど、問題点も多い。

しかし乍ら、下水道の効率的な整備促進の過程で、全国的にも人家がまばらな区域については合併浄化槽等による個別処理での対処が至当とされた経緯にある。公共下水道による集合処理の恩恵を受けられない地域の家庭に対して自治体が浄化槽設置費用の一部を補助する例は現在でも見られるところであるが、これはあくまでも公共下水道を整備するまでの過渡的措置である。

3. 公共下水道整備にあたって

このところ国や地方の厳しい財政事情等を背景に公共事業見直しの動きが一段と高まっているが、六甲山上の公共下水道整備は、生活に密着した社会资本であるにもかかわらず未整備であるというだけでなく、貴重な自然環境を守り、これを将来世代に引き継いでいくためにも、真に必要な事業であると考える。

(1) 神戸市による基本検討

平成7年度に神戸市が六甲山地区下水道整備の基本検討として取りまとめた報告書によれば、「鈴蘭台処理区に接続する方法で、六甲山地区、摩耶山地区、再度山地区の3地区一体の整備」とし、概算事業費として、当時の六甲山上の家屋724戸を対象に全戸整備を条件に、「総事業費として132億円（このうち約71億円が国の補助対象事業費となる予定）」を見込み、年間収支は「収入5千万円、費用7億3千万円、差引き6億8千万円の不足」となっている。

なお、これは山上の高低差等の割高要因も考慮しての平成7年度の試算であるが、最近の建設工事単価の下落や起債償還額に要する金利の低下などを勘案すれば、上記試算に比して、初期投資額並びにランニングコストの大幅な縮減は十分可能と考えられる。

(2) コストは幅広く負担すべき

神戸市の検討によれば上記試算による年間6億8千万円の赤字対策が必要になるのであるが、この赤字を「居住者」等に限定して使用料に賦課することは、当該地区からの強制退去命令の発動に等しいこととなる。

まして神戸市では、今や下水道普及率は98%に達し、直接的な受益負担原則という

整備促進期のロジック以外にも考え方を広げていくべき時期を迎えていた。

①市民による負担

例えば、市街地からの六甲山の眺めを「借景料」、乃至は、緑を消費するという意味で「緑の消費税」と捉え、その恩恵を受けている市民ひとり一人が些かでもその整備・維持に関わる費用を負担することを提案する。

因みに上記年間コスト6億8千万円は一見割高と思われるかもしれないが、これを市民全世帯で負担すれば 1 世帯当たり月 100 円弱と、負担しえない額とはいえないし、六甲山への市民の意識を高める意味でも検討すべきであろう。

②公衆トイレ利用者からの徴収

往時の半減とはいえたなお 5 百万人規模の入込客の多くは、登山ルート上を中心略 4~5 時間を過ごすことから、公衆トイレを整備・拡充し、その利用者から「ワンコイン徴収」を行い、これを山上の公共下水道費用にも活用することを提案する。

六甲山上地区の下水処理につき個別処理から集合処理への転換を図ることは遠い将来に向けた責務である。併せて山中のトイレ施設の拡充等を行うことは、「都市公園」ともいえる六甲山に不可欠な措置であると考える。都市は 1 つのブランドであり、そのバリューや驚くほどうつろい易い性格を帶びている。かりそめにも、登山ルート上での一部の不便・不快な経験が コウベ・ウォーターに象徴される神戸の「自然」のイメージを損なうことに繋がるリスクをこれ以上看過すべきではない。

(3)行政に期待すること

公共下水道整備は、利用者の利便性向上を通じて、「塩漬け状態」とも言える遊休保養所・個人山荘の再活用の幅を広げることにも繋がる。既に、管理・運営コスト軽減のため、各施設を共同管理・運営するシステム(NPO 等との協働)の取り組みも始まっているが、行政に対しては、施設の増改築や用途変更を妨げている規制の一段の緩和乃至撤廃・閉鎖施設・用地の買い手に対する税制上の優遇措置、行政による適正価格での買取りといった措置も含めた検討を期待する。

なお、既に自費を投じて合併浄化槽等を整備したホテル等に対しては、公共下水道への切り替えに伴う負担軽減のため、(イ)一定期間、上下水道利用料金を割り引く、(ロ)同じく固定資産税等を軽減する、などの措置を講じることも必要である。

(神奈川県箱根町における下水道整備の事例)

六甲山と同様、山上に位置し、芦ノ湖を擁する神奈川県箱根町では、費用の公的負担(県による負担)を前提に、昭和 50 年度から 10 年間にわたり特定環境保全公共下水道の整備が行われたが、これは同町の旅館・ホテル等観光産業の神奈川県域全体にとっての重要性にも鑑みての対応であったとされる。

VI. おわりに

この提言では六甲山上の下水道整備をとりあげたが、これは六甲山再生・活性化のための第一段階にすぎない。六甲山の活性化策は従来から各方面で提唱されてきた。しかし、上物のプランがいくら立派であっても、土台であるインフラがしっかりとしていなければ効果は十分發揮できない。下水道整備は六甲山活性化のいわば礎である。

この提言を機に、神戸市を中心として各方面で六甲山上の下水道整備機運が盛り上がり、実現に向かって大きく前進することを期待したい。

繰り返しになるが、われわれが目指しているのは、単に下水道を整備することではない。それを起爆剤として、六甲山上がスポーツや芸術、文化、保養、研修など多彩な活動の場として一層活用され、新たな賑わいが創出されることである。こうした活動を通じて、神戸が得意とする生活関連産業のビジネスチャンスも広がり、地域全体の活性化にも繋がっていくものと期待される。

上記インフラ整備に続いて取り組むべき課題は何か。それは「時代変化や環境変化に対応して六甲山を将来どのような姿にしたいか、そのためには何を為すべきか」を考える、いわば“旗振り役”的必要性である。

そしてこの問題に深い関心を寄せる人々の下で、六甲山全体の健全なるマスタープランを作ることである。

これまでも六甲山活性化策は種々論じられてきたが、全体をまとめるマスタープランが明確でないため、行政各部門や企業、市民などは各々「何とかしなければ…」と思いつつも現行の法や規制の枠内で考えざるをえず、必ずしも全体の調和がどれ実効性のあるものにはなってこなかった。

他地域に目を転じると、湯布院や黒川温泉のように、その地域全体の魅力向上に成功しているケースも少なからず見ることができる。

こうした成功事例を調べてみると、そこには概ね『地域づくりの三つの機能』が備えられていることが解る。

具体的には、①地域づくりのプランナー（企画・立案担当）、②地域づくりのプロデューサー（役割分担・計画推進担当）、③地域づくりのコーディネーター（連絡・調整担当）の三つの機能を持つ“個人”もしくは“組織”的存在である。

そして地域づくりが、こうした存在を活かしながら具体的にプラン（政策化）・プロデュース（計画化）・コーディネート（コンセンサス化）していくことが重要である。

市民・行政・企業を問わず、六甲山に関心を持つ人々が、この三つの機能の下にまとまり競って知恵を出しあれば、必ずや夢豊かな“六甲山のグランドデザイン”が描けるはずである。

こうしたコンセンサスの下では、ある地域に特区的な規制緩和や税制優遇措置などインセンティブを付与して集客施設の整備が進む一方、他の地域には自然を充分楽しめるよう環境保全が徹底されるなど、メリハリのある新鮮なプランがこれまでの利害関係を越えて提案されてくることが期待される。

かつて六甲山の魅力に取り付かれ、ここを拠点に壮大なスケールの夢を描いた人物がいた。大谷探検隊を組織したことで有名な西本願寺第22世門主・大谷光瑞がその人である。

明治41年、大谷は3本の専用ケーブルカーで山麓と結んだ六甲山の中腹（現甲南大学の北側）に、総面積24万坪の敷地を擁し古今東西の建築様式をとりいれた2千坪の建坪を誇る破天荒で壮大な別荘を建て、そこを「二楽荘」と命名した。

一般にも公開され、往時には一日最大7万人の人々がそこを訪れたと記録されている。「二楽荘」の名称は「海と山の双方の風情を楽しめる、またとな絶景の地」に由来し、別荘の横には全寮制の武庫中学を開校、生徒は全国1万1千寺から僧籍に拘らず多くの秀才を選抜したと言われている。

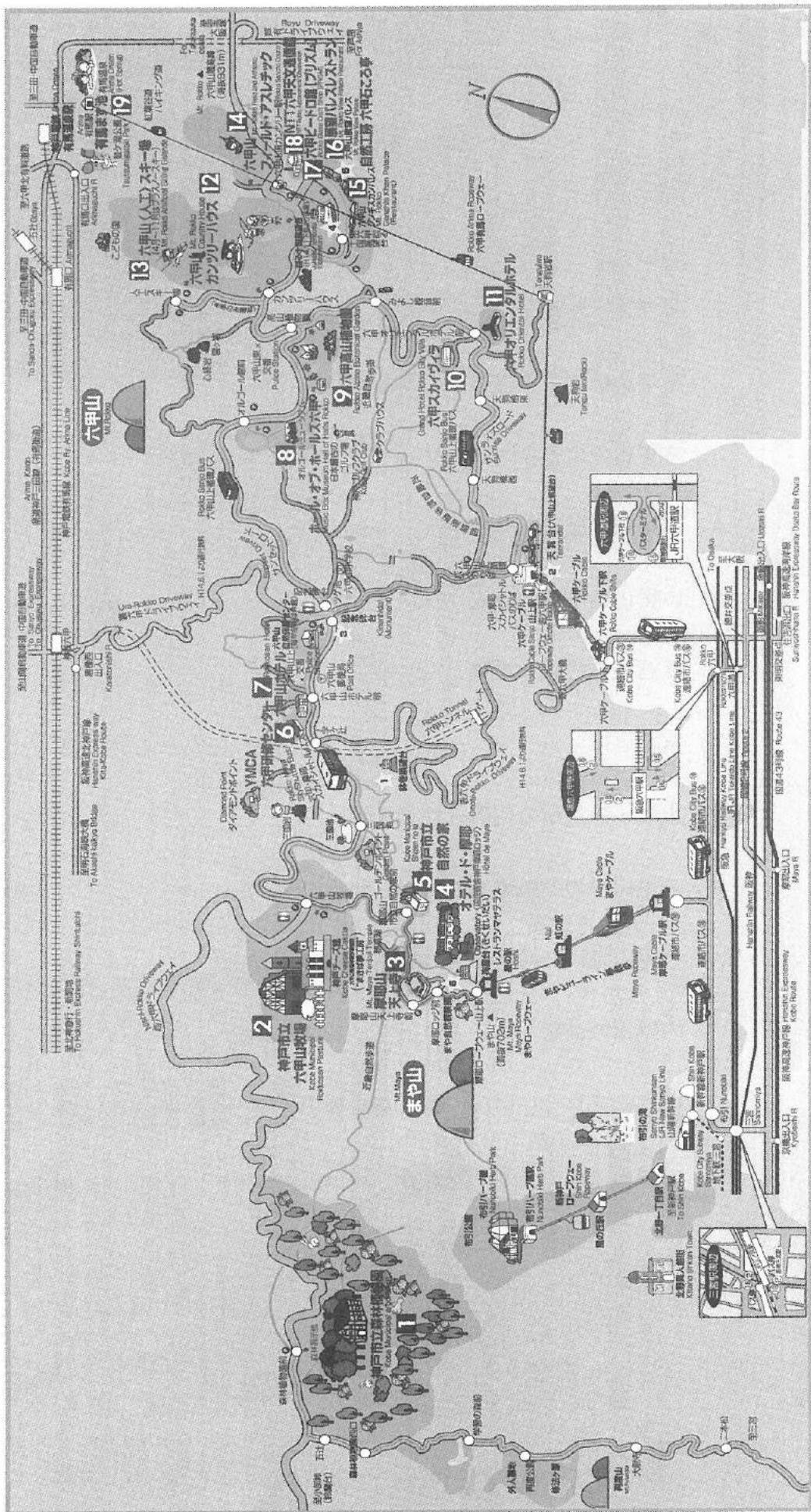
「二楽荘」は歴史の彼方に消え去り今は無いが、「神戸の魅力は海と山の双方を楽しんでこそ…」という“先人の想い”を、21世紀に相応しい六甲山のグランドデザインの下にもう一度叶えたいと願うものである。

〈 資 料 編 〉

目 次

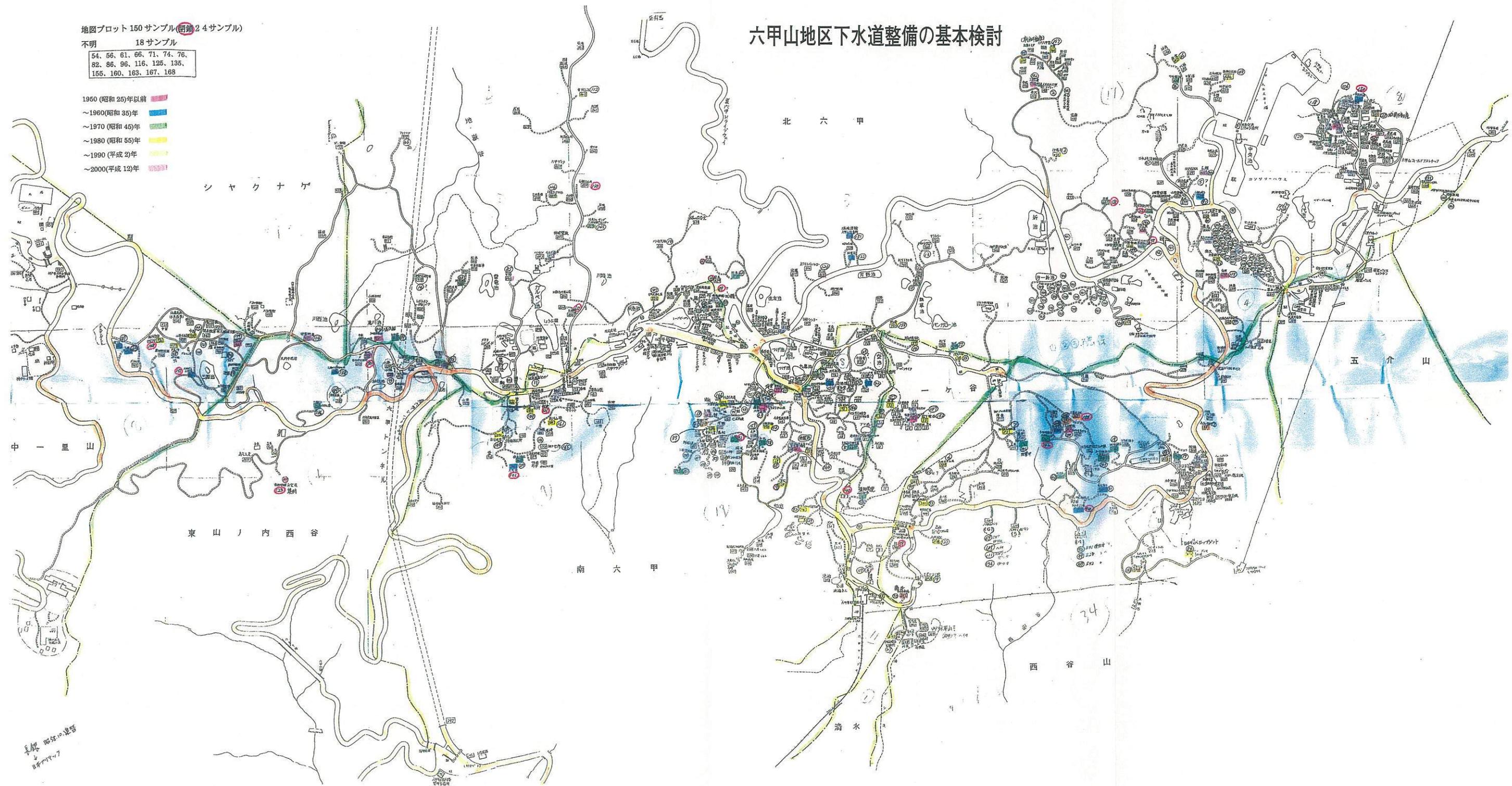
1. イラストマップ	12
2. 六甲山地区下水道整備の基本検討	13
3. 六甲山の全景	14
4. 六甲山の歴史	15
5. 六甲山の地名の由来	18
6. 入込観光客数の推移	19
7. 宮水とは	19
8. 山荘・保養所の閉鎖・稼動状況	20
9. 六甲山等の各種施設の状況と利用規則	21
10. 六甲山地区における土地利用の基準のあらまし	22
11. 六甲山の公衆トイレ・市民トイレ設置状況	23
12. 下水のフロー、財源、費用負担等	24
13. 六甲山に関する新聞報道等	25

1. イラストマップ

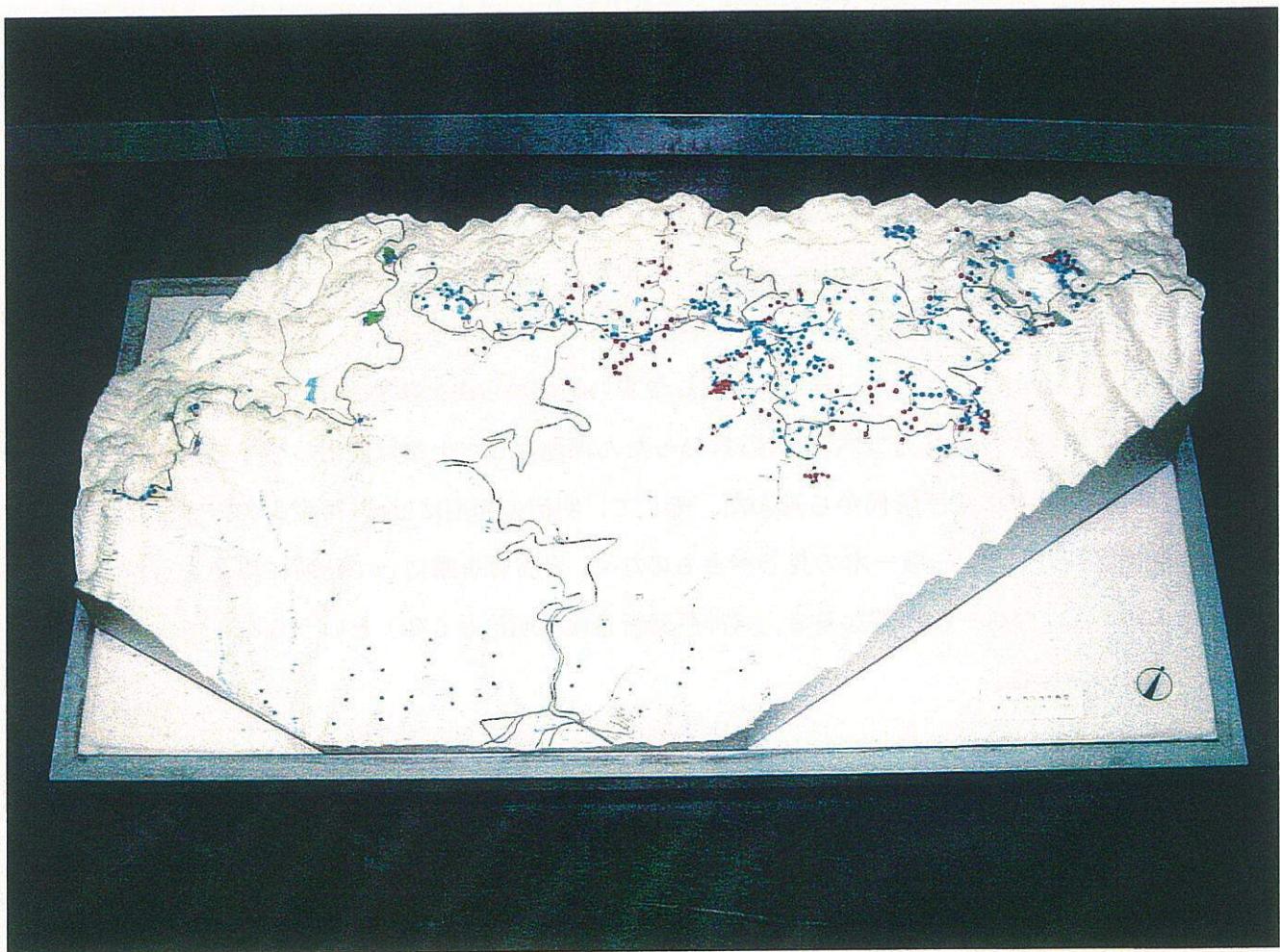


(資料) 六甲山・まや山ガイドマップ

2. 六甲山地区下水道整備の基本検討



3. 六甲山の全景



六甲山地区地型模型

立面 1:3333

平面 1:5000

赤点 ポンプを必要とする建物

青点 自然流下の建物

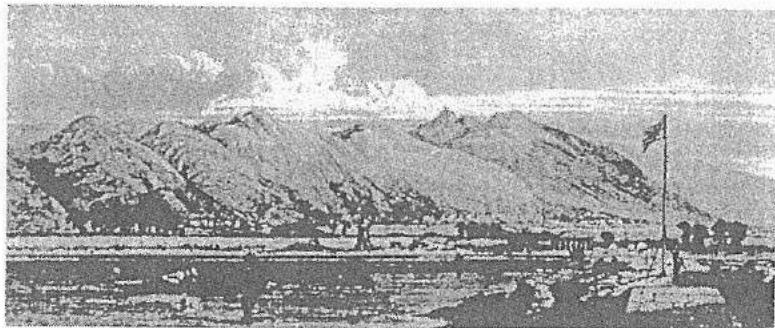
4. 六甲山の歴史 (資料「六甲山緑化100周年記念 第1回市民懇談会資料」より)

(1) 六甲開山・植林開始まで

◎ 秀吉による大阪城築城以来、明治初期まで六甲山は禿山であった

「私は瀬戸内海の海上から六甲山の禿山を見てびっくりした。はじめは雪がつもっているのかと思った。」明治14年に神戸港に寄港した植物学者、牧野富太郎博士がこのように記しているように、明治初期の六甲山は大部分が禿山であった。これは、古く秀吉による大阪城築城の際、石垣に使用するため六甲山より莫大な石材が伐出され、その代償として「六甲の樹木伐採勝手たるべし」との布令が出されたことに由来するとも伝えられる。入会地となった六甲山では、日常生活において必要な燃料や田畠の肥料などを確保するため、木材や柴草の過剰な採取が行われるようになった。また、乾燥しやすい気候から山火事も多かった。元来、風化作用に弱い御影石より成り立つ六甲山では、いったん裸地化した土壌は流逝しやすいため緑の回復は難しく、荒廃は江戸時代から進んだ。そして、明治の初期には、「再度山の後方一帯の連山は全面赤砂にして、一層一木の見るべきものなく、岩石骨を露にして諸所に黒色を点綴するあるのみ、さながら一小沙漠なりき。」(神戸又新日報 明治35年)という荒れ果てた姿となっていたのである。

1868年開港当時の神戸港と
六甲の山並み
(イラストレイティド・ロンドンニュース)



◎ 明治中ごろ、グルーム、ドントら外国人によって六甲山のレクリエーション利用が始められた

人々の身近なレクリエーションの場として六甲山が繁栄する基礎を築いたのは、イギリス人貿易商のA. H. グルームであった。グルームは明治28年、それまで山麓住民以外ほとんど人が入ることがなかった六甲山の三国湖畔に別荘を建て、仲間の外国人たちと共にゴルフ場の建設等娯楽的なスポーツを展開した。また、明治43年にはゴルフの名手でもあったH. E. ドントらが、登山クラブM G C Kを設立し、六甲山をはじめ日本の山岳を歩くとともに、地元市民にもハイキングを普及させていく。

● 明治35年より植林・砂防事業が本格的に開始 本多静六博士によって豊かな森づくりが目指された

明治35年11月、再度山周辺から始められた六甲山の植林は、上水道整備に際しての水源涵養や土砂流出の抑止を目的とするものであったが、同時に六甲山本来の植生への配慮、混交林の創出、市民の森林レクリエーションなども視野に入れたものであったことは特筆すべきである。これは、初期の造山調査を行った林学博士本多静六の指導によるものであり、今日、美しく豊かな森が形成されるに至った重要な背景となっている。また、植林開始当時の写真など貴重な資料が残されているが、これも、人の手によってつくられた森の遷移を定期的に記録することの重要さを認識していた本多静六の指導によるものである。

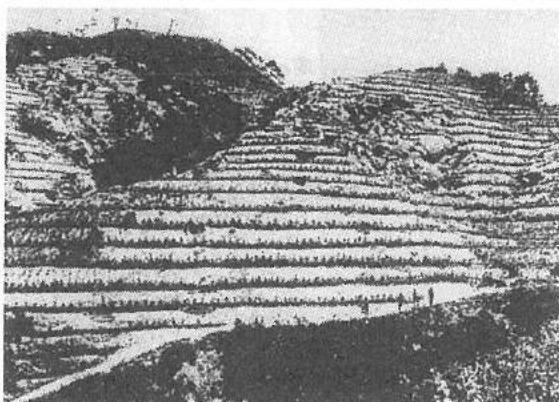
(2) 緑化・緑地保全の歴史

● 大正から戦後にかけ、六甲山の緑化は一進一退しながら進められた

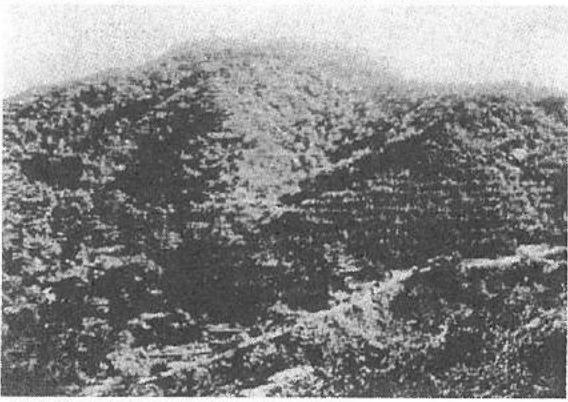
大規模な造林事業は明治期でほぼ一段落したが、山火事による焼失、戦中戦後の木材の持ち出し、戦後の乱開発など、その保全・育成は一筋縄でいくものではなかった。しかし、大正期以降も森林の保育並びに新たな植林が行政や市民によるたゆまぬ努力によって継続的に行われたことで、一進一退しながらも六甲山の緑化が進められてきた。中でも、神戸緑化協会（昭和22年発足）、六甲をみどりにする会（昭和30年発足）等の市民運動は大きな力となった。



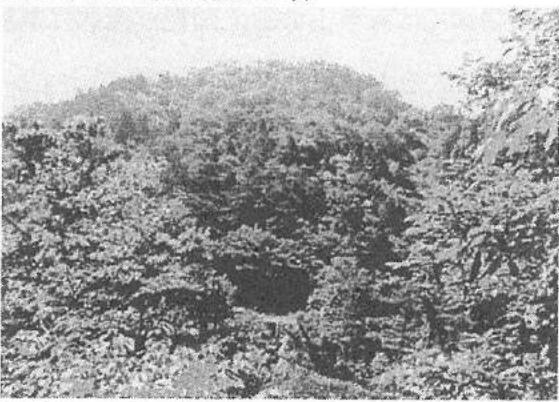
修法ヶ原一帯の砂防林造成工事の様子(明治36年)



植林1年目の再度山(明治37年)



植林後5年目の再度山(明治41年)



植林後96年目の再度山(平成11年)

● 昭和40年代以降、背山緑化の取り組みが重点的に進められてきた

昭和41年以降、神戸市では大面積の造林を含む背山緑化事業を新たに展開した。昭和46年からは「市域の7割緑地保全、市街地の3割緑化」を目標とした「グリーンコウベ作戦」が開始され、背山の緑化に対する一層の努力が払われてきた。なお、明治期以降の森林の保護・育成は主として市有林及び財産区有林で行われており、現在、市街地に近く重要度の高い約2000haの森林が市有林となっており、神戸市が森林の保護・育成を行っている。

(3)レクリエーション利用の歴史

● 大正期には市民によるハイキングが盛んに行われるようになり、当時の伝統は今日まで受け継がれている

外国人によって始められた六甲山登山を日常身近に見てきた市民はすぐにその影響を受け、明治43年には、塚本永堯を中心となって「登山趣味を涵養し心身の研磨に資する」ことを意図した関西初の登山団体、神戸草鞋会（KWS）が創設された。神戸草鞋会は、毎日登山やハイキングの他、ハイキングコースの開拓、維持、改修に努め、登山地図や機関紙を発行するなど登山の普及に努めた。これらの伝統は今日でも毎日登山の団体等に引き継がれている。

大正期には市内で数百を越える登山会が設立され、一日当たりの登山者数は平日で2万人、休日では4万人以上と記録されている。

● 六甲山では古くからウィンタースポーツが盛んに行われた

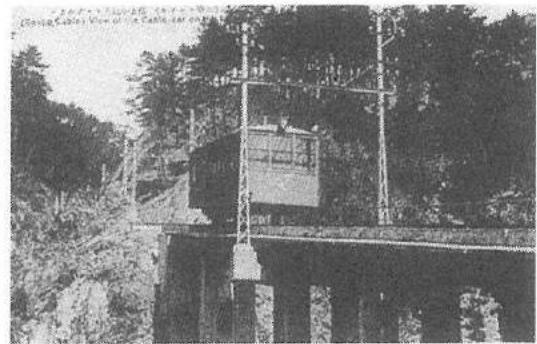
六甲山ではゴルフ場をゲレンデとしたスキーや池でのスケートが、外国人や登山会のメンバーによって関西では最も古く大正初期から行われ、冬期登山やスキーの開発指導も行われた。

● 昭和初期には六甲山の山上開発が急速に進展した

昭和に入ると、昭和2年阪神電鉄が山上一帯を買収したのを皮切りに六甲山の山上開発が一気に進展する。裏六甲・表六甲ドライブウェイの開通、六甲山ホテルの開業、阪急電鉄による六甲ロープウェイ、阪神電鉄による六甲ケーブルの開通、高山植物園の開園、東六甲ドライブウェイの開通、山上の社



大正期 女子学生による登山



昭和7年に開通した六甲ケーブル

交場カンツリーハウスの開業など、10年程の間に進展した六甲山上開発によって、六甲山上は観光地として大きな賑わいを見せるようになった。

しかし、昭和13年の阪神大水害による表六甲ドライブウェイの崩壊、第二次世界大戦中のロープウェイの撤去など、戦争を経て六甲山上は再び荒廃していくこととなる。

● 昭和31年、国立公園への編入を契機に、再び山上のレクリエーション開発が進展する

荒廃する六甲山の次の転換点となったのは、昭和31年の瀬戸内海国立公園への編入であった。同じ年、長年閉鎖されていた表六甲ドライブウェイが復活、六甲山牧場もこの年に誕生している。その後も森林植物園の開園、人工スキー場の開設、六甲有馬ロープウェイ開通など、様々なレクリエーション施設が整えられ、観光客も右肩上がりで増える中、近年でも布引ハーブ園やオルゴール館が開設され、人気スポットとなっている。しかし、平成7年阪神大震災以降、レクリエーションの多様化などにより全山的に著しい衰退傾向にある。

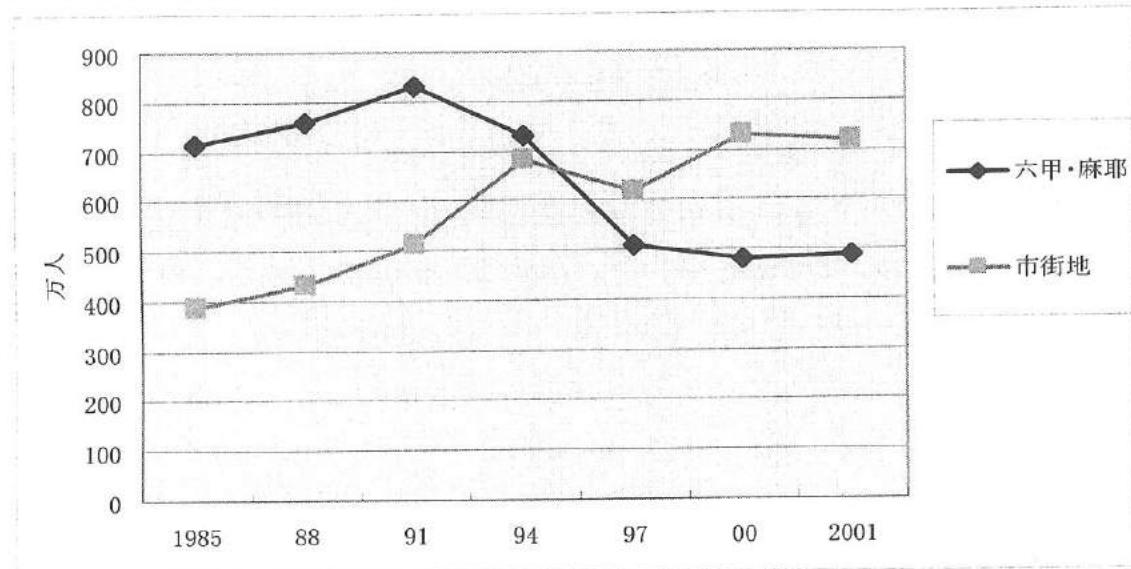
5. 六甲山の地名の由来

今から200年ほど前の寛政年間に書かれた「摂津名所図会」によると、武庫郡の第一の項目が「武庫山」で「武庫郡の北西にあり、東西五里、南北三里」とほぼ六甲山系主要部全体を指していて、「一名六甲山」と記している。それより100年ほど前の「摂陽群談」や50年前の「摂津志」なども武庫山を項目として挙げ、一名六甲山と述べていることから江戸時代までは、むしろ武庫山が正式な呼び名だったことがわかる。

古代、大和が日本の中で、そこから大和川沿いに浪速（大阪）に出た人々は、大阪湾のかなたにある山や里を遠望して、ムコウの山、ムコウの川と呼んだ。漢字の伝来と共に日本語の呼び名に漢字が当てられた。「向（むこう）」山でいいのだが、地名は漢字2文字で標記することが命ぜられ、ムコウの音に当てた二字「武庫」山、武庫川、武庫郡などの表記が一般となり、たまたま六甲（ムコウ）の字も使われた。この読み方がいつしか誤られて、「ロックウ」と読まれてしまうと本来の語意がわからなくなり、漢字の意味から、神功皇后が六つの兜を埋めた山だなどと伝説されるようになってしまったのである。

（資料）ヤマケイ関西『六甲山』（山と渓谷社刊）の
「六甲登山史」（文・園田学園女子大学教授 田辺眞人）

6. 入込観光客数の推移（六甲・摩耶地区、神戸市街地地区）



(資料) 神戸市

7. 宮水とは

宮水とは、西宮の海岸近くに湧き出す名水のこと。六甲山に降った雨水が、御影石という花崗岩地帯にしみ込み、伏流水（河川を流れる水が川底から地下へと浸透し、流れている水）となって海岸方向へ流れ、それに六甲で湧き出す炭酸を含んだ水が地下にある古代の貝殻層を溶かしながら加わり、独特の成分をもつ硬水となったものである。

この宮水は、酒の仕込みに欠かせないリンやカリウム（乳酸菌や酵母菌の発育を促す）などの鉱物質を豊富に含み、逆に酒質に悪影響をおよぼす鉄分が極めて少ないのである。

(資料) 沢の鶴株ホームページ

8. 山荘・保養所の閉鎖・稼動状況

兵庫県警灘警察署への当委員会ヒアリング結果

・平成13年度一斉調査によれば、企業保養所は572戸(営業中186戸、季節営業164戸、閉鎖中136戸、廃屋50戸、更地状態36戸)。

(平成14年7月16日・当委員会によるヒアリング)

◎山荘・保養所の閉鎖・稼動状況

六甲山自治会会員数・六甲山町内会世帯数の推移

年度	自治会会員数					町内会 世帯数	(参考)六甲山上の人口	
	A会員	B会員	C会員	特別会員	世帯数		世帯数	人口
昭和50年	412	16	212	180	4	—	276	781
55年	428	34	214	179	1	—	326	716
60年	419	30	227	161	1	239	337	702
平成2年	408	27	229	157	1	208	253	521
3年	402	27	227	147	1	207	—	—
4年	395	28	227	139	1	210	—	—
5年	392	28	228	135	1	207	—	—
6年	389	27	226	135	1	202	—	—
7年	389	27	224	137	1	196	223	468
8年	391	27	226	137	1	194	—	—
9年	377	27	212	137	1	185	—	—
10年	368	25	205	137	1	186	—	—
11年	359	25	196	137	1	170	—	—
12年						160		
13年						155		

(注)

- ・A会員：山上で事業を営む者、 B会員：会社関係の山荘・保養所、 C会員：個人山荘
- ・特別会員：六甲山郵便局

(資料)「六甲摩耶活性化研究会報告書」(平成12年1月)ほか

9. 六甲山等の各種施設の状況と利用規制

地区	施設の状況	利用規制
六甲	ホテル:六甲山ホテル、六甲オリエンタルホテル 六甲スカイヴィラ、凌雲荘(宿泊部門休止) 施設:カツリーハウス、フィールドアスレチック、 回る十国展望台、NTT 天文通信館 博物館:ホール・オブ・ホールズ六甲、高山植物園 ゴルフ場:神戸ゴルフ俱楽部 その他:六甲最高峰、記念碑台 保養所・山荘:334(自治会加盟数)	<ul style="list-style-type: none"> 別荘や保養所が立地する地域は、自然公園法の「第2種特別地域」と、緑地条例上の「緑地育成区域」に指定されている。 保養所等の新築は出来ない。 建替えや転売については、高さや床面積、緑地率等の制限が設けられている。
摩耶	施設:六甲山牧場、自然の家、掬星台 摩耶自然観察園 寺:摩耶山天上寺 国民宿舎:摩耶ロッジ(現在のオテル・ド・摩耶) 保養所・山荘:25(自治会加盟数)	<ul style="list-style-type: none"> 掬星台周辺から六甲山牧場にかけては自然公園法の「第1種特別地域」と緑地条例上の「緑地の育成区域」に、明石神戸宝塚線から北側の保養所周辺は「第2種特別地域」と「緑地の育成区域」に指定されており、保護を図る区域とされている。 保養所等の規制については六甲地区と同じ。
再度	博物館:森林植物園・学習の森 公園:再度公園 キャンプ場:洞川教育キャンプ場 寺:再度山大龍寺 その他:外国人墓地	<ul style="list-style-type: none"> 自然公園法上は「特別保護地区」と「第1種特別地域」に、緑地条例上でも「緑地の保存区域」に指定されており、緑地を保存すべき区域として位置付けられている。」

(資料)「六甲摩耶活性化研究会報告書」(平成12年1月)

10. 六甲山地区における土地利用の基準のあらまし

この基準は、六甲山地区（市街化調整区域）において、觀光資源の有効な利用上必要な建築物の開発行為等を行う場合の都市計画法第34条第2号の運用基準を定めたものです。次のように開発行為等が新たに認められるようになりました。

なお、この基準は、自然公園法などの他の法令等の規定に適合する事とが前提です。他の法令等については別途手続きが必要な場合がありますので、ご留意ください。

<新たに認められる開発行為等>

(1) 現存建築物の用途の変更（新設は不可）これまでに原則として同一用途のみ可

<変更可能な用途の例示>

- ① ホテル、旅館、保育所、ベンジョン、セミナーハウスなど
- ② 美術館、工房・アトリエ、体育館など
- ③ レストラン、飲食店（園芸適正化法の許可を要する施設は除外）など

なお、変更可能な用途は、自然との調和等の観点から限定されています。

(2) 建築物の建て替え、移転、共同化（上記の用途への変更をあわせて行う場合も認められることになりました）

- ① 建築物の建て替え
- ② 元あつた敷地から他の敷地への建築物の移転
- ③ 建築物の共同化

<新たに認められる開発行為等>は次の<土地利用基準>により認められます

<土地利用基準（概略）>

（対象建築物）

図面の区域内にある建築物で現存するもの。なお、既に撤去（廃屋を含む）した場合はも対象建築物として認められる場合があります。

（対象区域）

灘区六甲山町にある瀬戸内海国立公園第2種特別地域であつて、がつ線地の育成区域の指定を受けた区域（図面参照）
※この対象区域は、対象建築物及び開発行為等による予定建築物の区域とします。

（手続き）

開発行為等を行う者は、市長の同意を受けた後でなければ、開発許可又は建築許可等の申請手続きを行なうことができません。（場合によつては、許可できない場合があります）なお、市長の同意には所定の申請書に関係図書等を添付する必要があります。

神戸市では申請書（関係図書等を含む）をもとに、開発行為等の内容が次の（同意の基準）に適合しているかどうか審査します。

（同意の基準）<新たに認められる開発行為等>もご覧ください
次の項目について内容が適合していない場合は、同意しない場合があります。（ここでの内容は概略ですので、詳細は別途お問い合わせください）

(1) 用途の変更の内容（限定されています）

(2) 建築物の建て替え

(3) 建築物の移転及び共同化

- ・合理的な理由があること
- ・完了したときは、違法な元の建築物の撤去及び跡地の整備を行うこと

(4) 敷地面積の制限

移転及び共同化による敷地面積は、原則として從前の敷地面積（別に法令の規定がある場合を除く）と同等とします。

(5) 面積の制限

移転及び共同化による建築物は、元の建築物の面積と同様以下とします。

(6) その他

特に（3）中の「元の建築物の撤去及び跡地の整備」については、看板書を提出していただき、その内容に違反した場合は、工事施行の中止、変更などの指導、助言をし、指導勧告に従わない者については、その旨公表します。

（根拠法令）

都市計画法第34条第2号（開発許可の基準）

（基準運用開始日）

平成13年4月1日から当分の間とします。

なお、この基準とは別に「瀬戸内海国立公園（六甲地域）管理計画」（環境省）による公園整備が可能な場合もあります。

<問い合わせ>詳細については、次のところへお尋ねください。

手手続き等については、 國致条例、緑地条例については、
神戸市産業振興局觀光交流課 神戸市建設局公園部計画課

Tel.(078)322-5339 Tel.(078)322-5444

開発許可制度については、 自然公園法、公園管理計画については、
神戸市建設局総務部宅地開発指導課 環境省神戸保護官事務所
Tel.(078)322-5411 Tel.(078)331-1146
2001.4.1発行

11. 六甲山上の公衆トイレ・市民トイレ設置状況

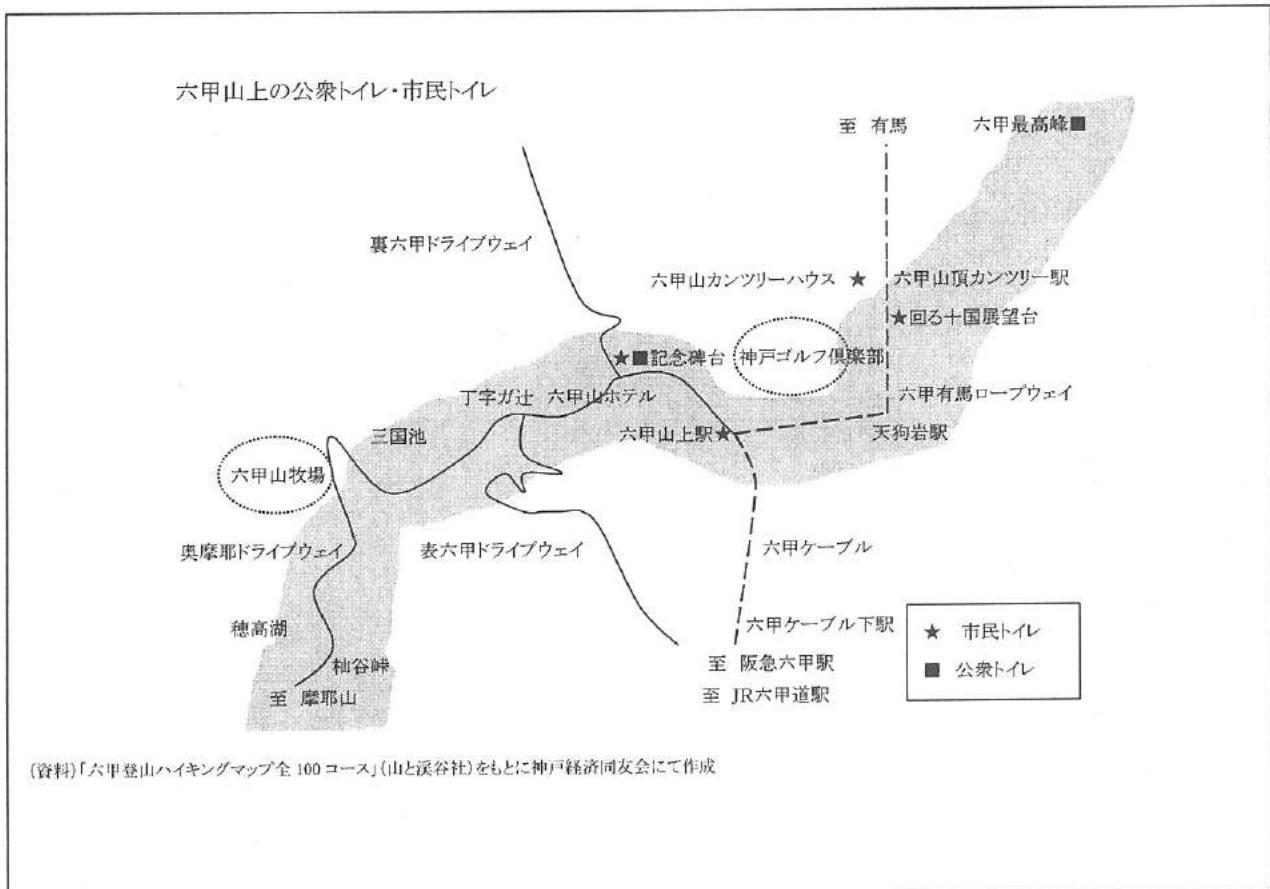
①公衆トイレ設置状況(平成14年5月現在)

名称	穴数(大)	設置(改修)年	形態
六甲最高峰	4	平成 10 年	土壤循環式(水洗)
六甲記念碑台	4	昭和 62 年	汲み取り

(資料)神戸市資料により作成

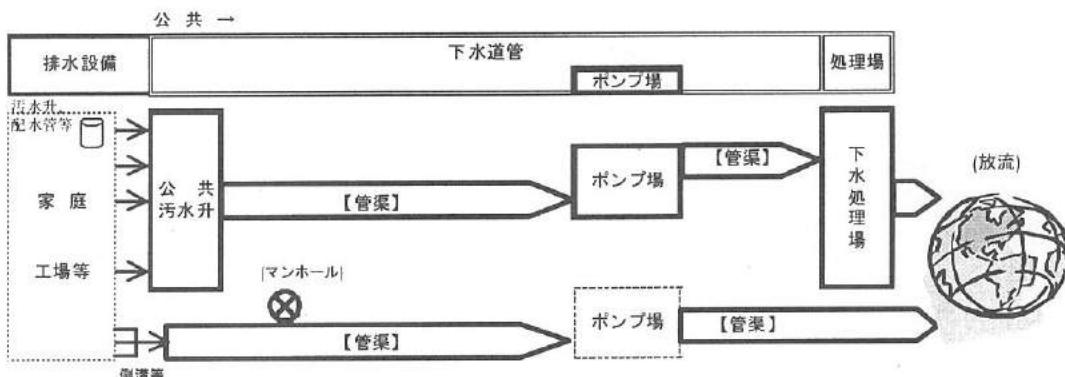
(注)神戸市森林整備事務所が管理しているもののうち六甲山地区

②公衆トイレ・市民トイレの設置場所

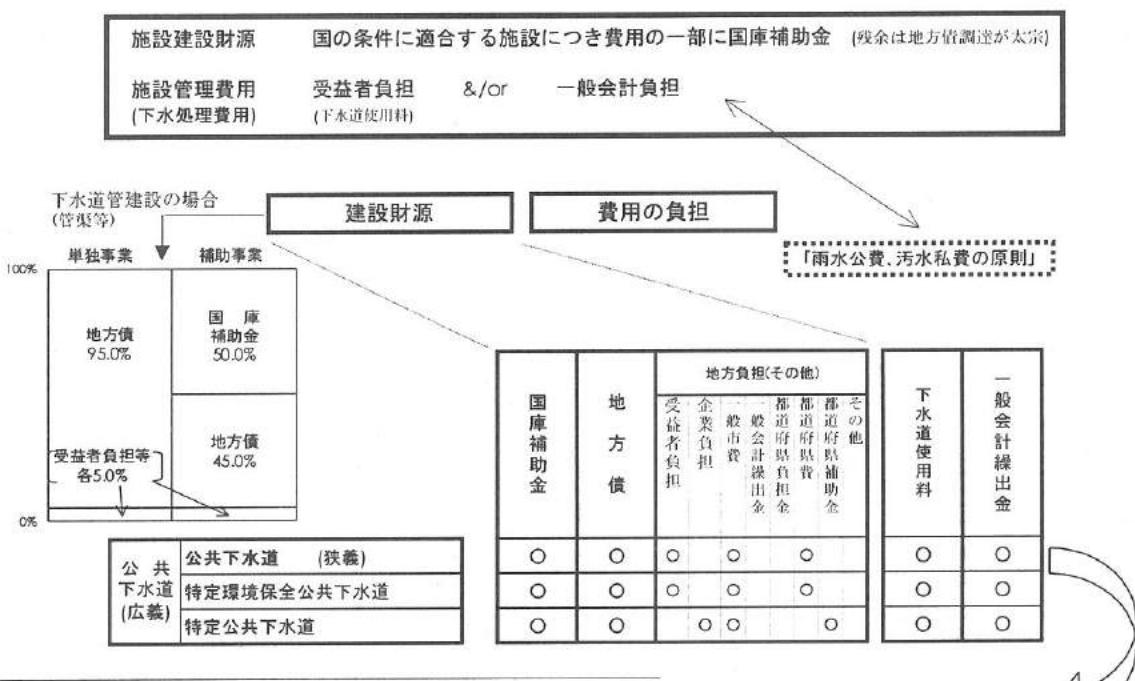


12. 下水のフロー、財源、費用負担等

【下水のフロー】(イメージ)



【財源、費用負担等】



注 1) 国庫補助金の根拠法：下水道法第34条*
 「公共下水道、流域下水道または年下水道の設置
 または改築を行う地方公共団体に対し、
 予算の範囲内において…費用の一部を補助できる」

*主務大臣が定める主要な管渠が補助対象
 (終末処理場はほとんどが対象)
 *他に緊急整備法等有

注 2) 「雨水公費、汚水私費」の考え方
 雨水 = 自然現象が原因：一般市民に受益
 → 一般会計負担

汚水 = 利用者の特定可能
 → 原則、受益者負担

神戸市の場合
 汚水一般排水(過程排水)の負担区分

維持管理費	使用料負担
資本費 (減価償却、利払)	
40%	
10%	*
一般会計負担 50%	

*平成12年の審議会答申で一般会計負担を
 従来の60%から引き下げる方向が示され
 経費削減等で対応中 (復興途上経済への影響等勘案)

(叙上は、日本下水道協会、
 神戸市の資料等より作成)

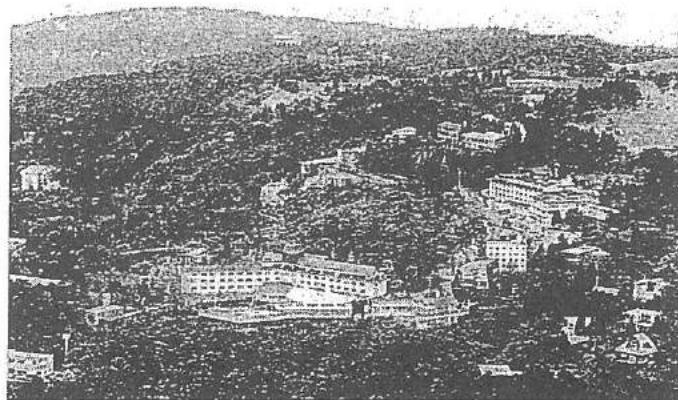
六甲山もつと元気に

六甲山にぎわい復活に取り組む
神戸市は、閉鎖が相次ぐ山上の保養
所をホテルや美術館などに転用でき
るよう、これまで原則禁止だった
建物の用途変更を今月から一部認め
る。市はすでに、保養所をネットワ
ーク化して社員以外にも開放する組
織づくりに乗り出しており、これに
続く山の「元気作戦」だ。

神戸市が規制緩和

不況によるリストラと利用者減
で、保養所は90年の2209から昨年
は175に減少。六甲山上は市街化
調整区域で建物の用途変更が制限さ
れているため、閉鎖された施設の多
くは放置されただままだ。

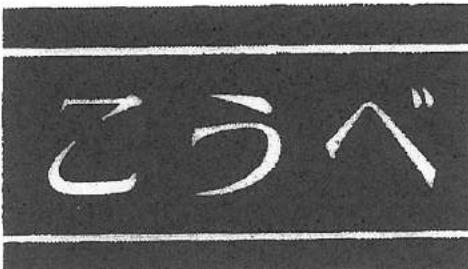
保養所がさびれば六甲山の観光
振興にも響くと市は、自然や景観保
護のため用途変更を一切認めていな
かった方針を転換。今月から保養所
が点在する山上の約450haの地域
について、宿泊施設、美術館、アト
リエ、飲食店などへの転用を容認す
る。移転や建物の共同化も認め、買
い手がつきやすくな。



年は482万人と激減しており、市
は保養所の利用者を増やすため、社
員以外の人も自由に宿泊できる規
制の組織づくりを進めている。
六甲山の活性化に取り組む市民団
体「六甲山と市民のネットワーク」
の福田信三副代表(53)は「用途変更
で保養所の活用の幅が広がれば、幅
広い層の観光客を呼び込める」と期
待している。

六甲山頂付近の保養所—神戸
市灘区で、本社ヘリから

(資料) 朝日新聞 (2001年4月5日)



勝呂病院
肛門科

内科 外科 形成科 腹腔鏡科
内視鏡科 泌尿器科 リハビリテーション科

阪神西宮市役所口南東徒歩3分 0798-22-1587

かのの 甲子



神戸経済界の若い方々と、神戸の町のために、なにをしたいべきか、を話し合う機会がありました。その席で、また話題になつたのは「六甲をどう再生するか」というJAPでした。

私が含めた何人かは、「空き家になつて」の別地といひの存在感は薄くなり、かどじりて野趣あふれる、ところが今は徐々に失なわれています。

私を含めた何人かは、「空き家になつて」の別地といひの存在感は薄くなり、かどじりて野趣あふれる、ところが今は徐々に失なわれています。

私が含めた何人かは、「空き家になつて」の別地といひの存在感は薄くなり、かどじりて野趣あふれる、ところが今は徐々に失なわれています。

私が含めた何人かは、「空き家になつて」の別地といひの存在感は薄くなり、かどじりて野趣あふれる、ところが今は徐々に失なわれています。

でもなご。六甲の緑の自然は絶対守らなければ

この点も強力でした。

討論ではありますんで、どうかが正確かと、いつ結論は出しません。でも、成り行きに任せてもいいわけない——ひとつ認識を一にしたのが大きな収穫でした。

◇

たまたま、神戸市の広報誌「市民のクラブ」に見えたほど、斯うだがむき出しのばかりでなく、六甲「10月會」が、六甲の緑化100周年を特集しています。

明治初年の六甲は、港に入る船から「白山」と見えたほど、斯うだがむき出しのばかりでなく、六甲の緑化100周年を特集しています。大阪築城以来の石材の採掘による人間活動をする人が気軽に遊びに来たり、「六甲」といふ意見を出しました。「神戸のシンボルは海」と、海辺が失われて100年は重生しておらず、植物が育たないまま崩れやすい地質なのです。

1902年から、水源確保と災害防止の目的で、約10年間にアカマツなど50万本の苗木が植えられ、緑化が始まりました。戦争をはさんで、開発が進む一方で、植林が進められ、現在の緑豊かな六甲が生まれました。いまも行政や市民グループの手で活動は続いています。

つまり、六甲は昔の姿がそのまま残ったのではなく、人が作り育てた「自然」なのです。その意味で、もっと市民が親しめるよう改めてしまは、というのも、より自然に近づける努力を続けるべき、ところのむしろ間違つてはいないのです。

六甲は世界でもまれな、都中に密着した山岳景観です。自然保護とリゾート利用を両立させる手段ではないのでしょうか。ヒントを探して

いるのが、鉄道紀行作家、萬國俊三さんの著書「夢の山岳鉄道」(JTB)を思い出しました。西脇駆け、実現可能性は別として、富士山や日本アルプスなどライフウエー代わる交

通手段として、鉄道の整備を提案しています。私もこのアイデアをじたたいて、神戸の町から六甲に登山電車を走らせるプランを考えてみました。

始発駅は海に直結したメリケンパークあたりがいいですね。元町からの「北野あたり」をテンデンント(通)を鳴らしながら走り、再度山をスイッチバックしながら摩耶山へ。森林植物園、六甲山牧場を経てケーブルロープウェーの駅を巡って山上を一周。

地図でせりふ計つて延長25キロ、展望を楽し

六甲を考える

みながう一時間程度の電車の旅です。
山を少しいじらなければなりませんが、道路を作ることだけは軌道幅はすいぶん狭いものです。代わりに自動車の乗り入れを禁止、規制して、ライフケーを自然に戻せば、環境への負担はすっと少くなります。なにより、「登山電車のある町」は、神戸の新しいブランドになるに違いありません。

これは鉄道ファンである私の願です。でも、「資金をどうする」とか「法律の規制は」と立ち止まる前に、みんながアイデアや知恵を出し合つてみる方が大事、そこから六甲の再生が始まることの一つです。【神戸支局長・西木正】

(資料) 每日新聞 (2002年10月21日)



六甲山の裏六甲ドライブウェイで、深夜に改造車を猛スピードで走らせる「ローリング族」が問題になつてゐる。今夏、テレビゲームのソフトや雑誌で紹介されたことをきっかけに、タイムトライアルのコースとして人気が再燃。関西一円から週末ごとに車が集まり、騒音や観光への影響に悩む地元は、道路の夜間閉鎖を警察に求めてゐる。

裏六甲ドライブウェイ

(記事・永田憲亮、写真・大山伸一郎)

同ドライブウェイは六甲山の記念碑台と六甲北道路を結ぶ約三・八キ。十数年前から運転技術を競つように、曲がりくねった道路を車が往復。二年前、住民や事業所、警察、行政などは「六甲山ローリング族特別対策委員会」をつくり、道路の段差舗装や取り締まりを進めてきた。

ゲーム、雑誌の紹介で過熱

ローリング族 またお騒がせ

十一月の委員会で、地元側は灘、有馬両署に夜間の通行禁止令を示した。両署と兵庫県警は通行止めについて検討を開始。ただ、同ドライブウェイは生活や通勤、観光道路として利用目的が広いえ、すでに六甲山周

ワイ
禁書

辺では、表六甲▽再度山
▽芦有一の各ドライブア
エイが、週末や夜間等な
どの条件でバイクや車が
通行禁止となっている。
警察側は規制の期間や

(資料) 神戸新聞 (2002年12月14日)

< 地域開発委員会における研究活動及び討議経過 >

(平成10年度)

12月 18日 ◇講演会

「転換期の都市経済と次世代型地域開発」

神戸商科大学教授 加藤 恵正氏

(平成11年度)

7月 2日 ◇第1回委員会 「六甲山を考える」

9月 3日 ◇第2回委員会 「六甲山を考える」

～神戸市建設局長 安藤 嘉茂氏を囲んで～

2月 23日 ◇第3回委員会 「六甲山を考える」

～六甲山に賑わいを取り戻すために～

・兵庫県自然公園担当係長 小寺 三木三氏

・神戸市観光交流課長 渡辺 由和氏

・「六甲を語ろう'99」

　　チシンポジウム代表 堂馬 英二氏

(平成12年度)

12月 12日 ◇「これから産業政策」

　　兵庫県産業労働部長 神田 栄治氏

(平成13年度)

6月 22日 ◇第1回委員会 「六甲山を考える」

～六甲山に賑わいを取り戻すために～

11月 7日 ◇第2回委員会 「六甲山を考える」

～六甲山に賑わいを取り戻すために～

12月 17日 ◇「六甲山を考える」パネルディスカッション

(平成14年度)

4月 23日 ◇第1回全体会議

(討議内容) 提言検討体制と検討概要について

5月 20日 ◇神戸市建設局へのヒヤリング

先方：神戸市建設局長、下水道河川部々長、宅地開発指導課主幹

当方：委員長、副委員長

5月 21日 ◇合同小委員会

6月 2日 ◇六甲山実地研究

(参加者) 委員、ワーキンググループ、米村先生 他 計16名

6月 14日 ◇第1回ワーキンググループ会議

6月 20日 ◇神戸市建設局へのヒヤリング

先方：神戸市下水道河川部々長 他

当方：委員長、副委員長

6月 24日 ◇第2回全体会議

(討議内容) 提言の方向性及び調査概要について

- 7月 10日 ◇神戸市生活文化観光局へのヒヤリング
先方：観光局長 他
当方：委員長、副委員長
- 7月 16日 ◇兵庫県警灘警察署へのヒヤリング
先方：灘警察署長 他
当方：委員長、副委員長、ワーキンググループ
- 7月 16日 ◇神戸市灘消防署へのヒヤリング
先方：灘消防署長 他
当方：委員長、副委員長、ワーキンググループ
- 7月 17日 ◇環境省自然環境局へのヒヤリング
先方：神戸自然保護官
当方：委員長、副委員長
- 8月 22日 ◇兵庫県国土整備部、県民生活部へのヒヤリング
先方：兵庫県国土整備部参事、県民生活部環境局長 他
当方：委員長、副委員長、ワーキンググループ
- 8月 22日 ◇第2回ワーキンググループ会議
- 8月 26日 ◇第3回全体会議
(討議内容) 調査報告及び全体の流れについて
- 9月 9日 ◇第3回ワーキンググループ会議
- 9月 11日 ◇神戸市建設局へのヒヤリング
先方：神戸市下水道河川部計画課係長 他
当方：ワーキンググループ
- 9月 17日 ◇国土交通省都市・地域整備局下水道部長へのヒヤリング
先方：兵庫県国土整備部参事、県民生活部環境局長 他
当方：委員長、副委員長、ワーキンググループ
- 9月 18日 ◇第1回正副委員長・ワーキンググループ会議
- 9月 25日 ◇第4回ワーキンググループ会議
- 10月 4日 ◇第2回正副委員長・ワーキンググループ会議
- 10月 15日 ◇神戸市建設局へのヒヤリング
先方：神戸市下水道河川部計画課長 他
当方：ワーキンググループ
- 10月 16日 ◇第4回全体会議
(討議内容) 提言骨子について
- 11月 5日 ◇第1回委員長・ワーキンググループ会議
- 11月 13日 ◇第3回正副委員長・ワーキンググループ会議
- 11月 26日 ◇第5回全体会議
(討議内容) 提言全体について
- 12月 9日 ◇第4回正副委員長・ワーキンググループ会議
- 12月 19日 ◇第6回全体会議
(討議内容) 提言最終案について
- 12月 26日 ◇第6回全体会議での討議結果を踏まえ、ワーキンググループが「最終案」を作成
- 1月 9日 ◇各委員からの意見を踏まえた最終調整
- 1月 10日 ◇常任幹事会で了承

〈提言作成に際し、ヒヤリング・資料提供にご協力いただいた方々〉

(順不同)

兵庫県県土整備部

兵庫県県民生活部環境局

兵庫県警灘警察署

神戸市建設局

神戸市生活文化観光局

神戸市灘消防署

国土交通省都市・地域整備局

環境省自然環境局神戸自然保護官事務所

環境省水環境部

六甲摩耶活性化研究会

六甲山ふれあいまちづくり推進協議会委員長 米村 邦稔氏

株式会社阪神ブルーノート代表取締役社長 山崎 登氏

オーベルジュ・コムシノワ ROKKO

〈平成14年度 地域開発委員会名簿〉

(敬称略 順不同)

委員長	堂木	信幸	中央青山監査法人	所長
副委員長	井浅植西	雄理	アサキインターナショナル	長
委員	井大	貞俊	小泉屋製糸所	長
	小	保義	西村屋コム地所	長
	奥	俱純	塩屋総合研究所	長
	柏	彦代	日本イズミ地所	長
	木	武貴	神戸井興	長
	佐	實裕	新中炭	長
	白	慶	甲南学園サービスセンター	長
	谷	真哲	六甲バタの瀬	長
	添	隆	広瀬化学	長
	瀬	三	エム・シーシー	長
	垣	夫治	大阪ガス	長
	水	正三	スリック	長
	三	努	共立サーキュレーション	長
	宮	隆	中央実業	長
	川	宏		役員
	宅	同		
アドバイザー	岩池	田弘志	ロック・フィールド	取締役
	田	三朗	川崎重工業	上席執行員
ワーキンググループ	石川	正恒	みなかと銀行	企画部調査室長
	岩崎	有祐	神戸製鋼所	神戸業務グループ長
	岡佐	良朗	川崎重工業	神戸総務グループ主事
	清	晃徹	東京海上火災保険	神戸支店営業第4課長
	中横	郁夫	三井住友銀行	金融調査室上席推進役
		朝行	ロック・フィールド	社長室長
事務局	穴本	幸二郎	日本総合研究所	関西経済研究センター主
			神戸経済同友会	研究員